

随想：吉田重信の世界—《虹ヲアツメル》と《光跡＝虹》を中心に

岡本康明 京都造形芸術大学

1994年の春、水戸芸術館で開催された水戸アニュアル'94『開放系 Open System』を観に行っ
た。その興味深いタイトルに惹かれて関西から足を運んだが、私が期待していた展覧会とは異な
り、どれも閉じた思索を迫る作品のように感じてしまい、重い気持ちのまま会場を後にした。帰り間
際、若手作家の新作を紹介する展示室クリテリウムに入ってみた。真っ暗闇で何も見えず、足早
に通り返しようとしたその時、「もう少しで見えてきますよ、今は雲がかかっているんです」と声を掛
ける人がいた。声の主は作品の制作者、吉田重信だった。暫く待っていると、ふいに暗闇の隙間
から白くて淡い光の環が現れたが、次の瞬間には薄れて消えてしまった。光の環は、現れては消
えることを繰り返した。そこに規則性や法則性はなく、出現する時間も鮮明さもその都度違って見
えた。残像効果の様にもみまごう淡い光の環は、空間に顔を出して、一瞬の表情を見せたのち、
暗闇へと溶け入った。移ろいながら生成と消滅をくり返す光の環を見つめていると、次第に身体は
弛み、鬱屈して気分も軽くなっていった。不可思議な現象を目の当たりにし、五感が開放されるの
を感じていた私に、吉田は「あの光の環は太陽光が映し出されたもの。今、現れたのは空を覆っ
ていた厚い雲が風に吹かれ、太陽が顔を覗かせたから。」と短い解説をしてくれた。この《Bio-
Morph》は自然光を光ファイバーによって室内に取り込んだ作品である。一見したところは映像作
品のようにも見えるが、実はその時の天候がリアルタイムに壁面に投影される仕組みになってい
る。私がこの作品に初めて出会った日は、曇り空の合間に晴れ間が覗く天候だったため、幸運に
も変化に富んだ光の環が鑑賞できたという訳だ。二階の展示会場から出口に降りる階段には、天
井のガラス屋根に設置された赤・青・黄の三色のビニールテープが陽射しの強弱によって、光の
帯となって白い壁に染み出すように広がっていた。これが《Infinite Light》と題されたもう一つの作
品だということは後に知った。

その日、芝生の庭で再び吉田と会う機会が持てたので、青空の下、作品について話を聞いた。
私たちは知り合ったばかりにもかかわらず、話が弾んだ。当時私は大阪の高校で美術の教員をす
る傍ら、インスタレーションの作品を制作、発表していた。吉田は、ものを作る側に居た私が最後
に出会った美術家であった。というのは、出会いの時には思いも寄らなかったことだが、私は翌年
から北関東の地に赴き、学芸員として働く事になったからだ。1995年、私は森(里山)のなかに開
館予定の美術館準備室に入り、展覧会企画や教育普及活動の構想や準備に追われていた。新
緑の季節だったか、吉田から展覧会の案内をもらい、福島県のいわき市に行くことになった。吉田
は私にどうしても見て欲しいものがあると言い、個展会場のギャラリーをそそくさと抜け出し、車で

市街から少し離れた河川に向かった。河原に下りると、車の中からプラスチックの容器と鏡を取り出し、川の水を容器に汲み、その中に鏡を入れて何か作業を始めた。水面を乱反射した光が、向こう岸の樹の幹に白い光を浮かび上がらせ、それから、ゆらゆらと虹が表われた。木肌に映る七色の光は徐々に鮮明となり、物質感さえ持って私に迫ってきた。木の葉を揺らす風や川のせせらぎの音、樹木の茂みから聴こえる鳥の鳴き声が身体に沁み入った。森のざわめき、太陽光と水と鏡と樹木——、私はふと“虹のワークショップ”が出来ないだろうかと、その場で吉田に提案した。後から振り返ると、そのときの吉田は虹を作品化するための試行錯誤をしていたというよりも、童心に戻って対岸の樹木に投影する虹を誰かに見せたかったようにも思う。あるいは吉田の興味のおもむく一瞬に立ち会い、微かな予感としての、創作への過程を見ていてくれる他者を必要としていただけなのかも知れない。この川での無邪気ともとれる実験から、しかし“虹のワークショップ”構想は始動し、後の作品にも繋がっていった。

私は《Bio-Morph》や《Infinite Light》以前の吉田の作品を直接見たことがない。図版で過去の作品を見ると、事故車のボディーの部品を平面上に繋いで構成したものや点滴瓶が等間隔に並び配置された作品など、一見するとそれぞれの素材が発する社会的な意味を持ったメッセージ性の強い作品に見える。が、同時にクラッシュしたボディーや点滴瓶による表現は、死や再生のイメージ以上に情緒的な部分も感じさせる。それは強度をもった物体による構成という表現方法に留まらず、自身の心の奥底にある何かに依拠することでようやく成り立った表現とも受け取れるのである。その後、吉田は〈光〉をテーマとし、素材の物質性からは距離を置き、非物質的世界に関心の対象を移して行った。当時は光のインスタレーションで知られるジェームス・タレルに強い関心を持ち、宇宙や時間をテーマにする宮島達男の作品や制作プロセスにも興味を抱いていたという。また、映画監督アンドレイ・タルコフスキーの『サクリファイス』は繰返し何度も見たと聞いたことがあるが、そこに描かれた魂への問いかけは彼のアートへの志向性と合うように感じたものだった。また吉田は多くの美術家と直に出会い、対話を重ねることで学んできたようだが、そこには相互に引き合う強い関係性が感じられる。例えば、宮島達男のいわき市美術館での作品展示に自主的に参加する事や、『Art Landscape in いわき'90』の企画・運営など、その直截的な行動と一連の作業のなかでの交流や関係性の蓄積が、後々新たな展開を生んでいったと考えられる。そのような吉田の行動力は、ある意味でワークショップ的であると言っても良いのかも知れない。

1980年代後半から日本ではミュージアム建設ブームが沸き上がった。それと相まってドイツやアメリカから最新の美術館教育が紹介され、教育普及活動が盛んとなり、草創期には多くの興味深いワークショップが生まれた。美術館でのワークショップといえば、一般に従来から行われていた画家や版画家による実技講習会が思い起こされるが、一方で“教える—教えられる”といった関係

ではなく、講師としての美術家も参加者も、共に主体的に関わることのできる活動としてのワークショップが見受けられる時代になっていった。学芸員として出発した当時の私もまた、ワークショップにそうした方向性を見ていたといえる。即ち、その目的として、必ずしも造形作品を完成させることを主眼に置かなくてもよいのではないかと、寧ろ、同じ時間、同じ場所での制作体験を通して、参加者同士、あるいは参加者と講師（美術家、学芸員等）とのあいだで制作に向けて語り合うこと、創造的体験を共有するという過程こそが得難い体験なのではないかと。そうした思考の背景には、勤務先である美術館が市内に位置しながらも広大な自然に恵まれていたという立地が強く影響していたといえる。国内希少種（現在は解除された）といわれたオオタカの棲息する森では、四季折々の風景のなか、参加者は美術家から提案されたワークショップのテーマに基づいた作業（それは作品を制作することでもある）を体験する。参加者らは場と時間を共有する作業の行程で、ときに美術家が対峙している制作への視点に触れ、各々が作業（制作）から表現の域を模索していくこともある。ワークショップという共同制作の現場において、美術家は単に技術の指導者としてではなく、一表現者としての姿を間近に晒すことにもなる。そうした緊張感を孕みつつ、ファシリテーター（リーダー）としての美術家と参加者とのあいだにしなやかなコミュニケーションが生まれる。

吉田の場合、彼の追い求めた虹は、ワークショップと美術作品の双方において実現されることとなり、ワークショップは美術館だけでなく全国の児童館や図書館などで今なお展開されている。しかし作家自身にとっては、ワークショップや美術作品といったジャンルの区分など必要ないのかも知れない。吉田にとってワークショップは自己と他者の境を越え、その境界を往復することから何らかの示唆を得て、自身の作品世界の視界を広げられる場としてもあるのだろう。つまり吉田が表現することを通して世界に向き合うとき、概して個人の作品制作という形がとられるものの、ワークショップという形もまた、吉田にとっては欠かすことのできないひとつの表現行為として在るのではないだろうか。

1997年夏、宇都宮美術館において開催された企画展『森ニイマス』は、森をキーワードに4人の現代美術作家により構成された展覧会だった。吉田の作品としては《Bio-Morph》、《Infinite Light》とともに、新作《光跡＝虹》が館内と館外2カ所に出品され、関連企画のワークショップ《虹ヲアツメル》が実施された。吉田は、春からの数ヶ月、自宅のあるいわき市から片道3時間余りをかけて宇都宮まで通い、美術館の森の木々に500余りの虹を映し写真撮影した。虹のスライド写真は、その内の170枚をライトボックスに並べ、ルーペで覗くことによって、リアルで臨場感溢れる森を感じさせる作品とした。また美術館西の回廊に面した木立では、透明容器に水を張り、角度をつけた鏡を入れたプリズムの装置が50個余り並べられ、太陽の移動や雲の変化によってリアルタ

イムに木々や枝葉に虹を映し出す作品《光跡＝虹》が生まれた。そこを訪れた人々にとって、目の前の木々に現れた虹は手に取るほどの近さにあり、樹木や、その先に続く森の神秘に触れるかのような体験となった。自然界の様々な現象を吉田は彼独自の方法で私たちの前に見せてくれる。その距離感の近さには意表をつかれるとともに記憶の底に眠る過去の思い出と再会するかのような親しみを感じる。ワークショップ《虹ヲアツメル》では、参加した大人や子どもたちは夢中になって水の入った容器と鏡だけのプリズム装置を駆使し、人の顔や着ているTシャツ、建物や木々に虹を映して楽しんだ。遠い空の向こうに時おり見えていた虹を自ら作り出し、その虹と戯れる時間は我々が自然と一体であった頃のことを思い起こさせてくれる。虹のワークショップは同年秋には、分光プリズムを使い日常の風景を観察するワークショップ《虹ノカンサツ》(O 美術館)へと展開した。さらに2002年に実施されたワークショップ(中京大学/アートギャラリーC・スクエア)は、参加者たちがバスに乗り、各々が窓からプリズムを用いて景色を観察し、刻々と移り変わる車窓の風景が虹の景として視覚化されるというもので、先のワークショップの展開としての広がりも見せた。またプリズムを取り入れた個人制作としては2005年に発表された映像作品《Breathing Light》(CCGA 現代グラフィックスアートセンター)がある。この制作ではプリズムにビデオを直接つないで撮影することで、記録された風景はスピード感をもった虹色の動く絵画として映し出された。云うまでもなく、この映像作品は2002年のワークショップから想起されたように思われる。これらが示すように、吉田は自身の表現においてワークショップと個人の作品制作の垣根をほとんど意識していないといえる。それどころか双方を軽やかに行き来するなかで、作品が誕生し、あるいは深化していく傾向は、吉田の作家としての稀なる特質といえることができそうだ。ワークショップの場と見知らぬ人々との出会いから受容した力を新たな創作のエネルギーに変換し、また自身の作品をワークショップの場とそこに集う人々に還元する——それらの循環を通して、吉田の志向する世界観はたおやかに立ち現れていくと言える。